観たい作品と読みたい作品

佃 典彦

一体いつまでこの感染症騒ぎは続くのでしょうか……どうも、名古屋のミラーマン佃です。佐藤信さんの体調を心配し、四人の選考委員で票が真っ二つに割れてしまわないか心配し、信さんの不在で最終候補者の皆さんがガッカリしないか心配し……とにかくアレコレ心配ばかりで新幹線に乗り込みました。しかし選考が始まると集中力が高まるせいか一気に吹っ切れていつもと同じ雰囲気の選考会になったと思います。

僕の中では「舞台を観たい作品」と「読んで面白い作品」とに大きく分かれました。

●『われわれは遠くから来た、そしてまた遠くに行くのだ』

とにかく舞台を観てみたいと強く感じた作品です。コロナ対策としてセリフ全部を録音して俳優達は口を開くことなく芝居をする。そんな無謀な上演が可能なんだろうか？ どうやって成立させたんだろうか？ 戯曲の最後のト書きを読んだ時に正直ぶっ飛びました。作品内容としては特に前半の閉じ込められた男性たちの会話が面白くてワクワクしながら読みました。どうしようもない男達の愚かしい懺悔の様が描かれています。途中、女性達が舞台に上がってからが少々もったいない感じがしました。男達の会話と女達の言葉のズレが平行線のまま進行していくところに無理を感じたのです。愚かしい男達を女達が見守る構造がアメトーーク的です。閉じ込められた愚かしい人間達という形で女性が混じっていたらどうなったんだろうと想像しました。しかしこの芝居の上演自体が今の世の中に鉄槌をくらわす感じがして非常に好感を持ちました。

●『バス・ストップ』

近藤さんの作品は以前に別の賞にて選考委員として読んだことがあります。その時に深夜帯のちょっととがったテレビドラマを書いたら面白いと思ったのですが、今回の作品も似たような感想を持ちました。ロードムービー的に家族の系譜（思い出）をめぐる旅という発想は実に面白い。ですが構造がやはり演劇的と言うよりラジオドラマ的になってしまってる感があるのです。登場人物たちのバスの乗車の仕方がもったいない印象です。現実の風太郎の生活感や日常で背負っているモノがもう少し描かれると良いと思います。乗車の仕方によっては風太郎や言葉（ことは）の日常を探りながら描いていく方法が見つかると思います。

●『かもめごっこ』

映画『シン・ウルトラマン』を観た時に似た読後感でした。チェーホフのいろんなシーンやセリフが散りばめられていてそれらを見つけながら楽しむ感じが似てたのだと思います。創立五十周年のアマチュア劇団の人間関係あるあるが非常に面白いし、胸に刺さったりします。ウチの劇団も四十年近く続いていますが苦々しさが身に沁みました。地震で中途半端な立ち位置に登場人物たちが置かれるのですが、これがいま一つ上手く作用していないように思います。ロビーか打ち上げ会場かでのワンシチュエーションで描くことは無理だったでしょうか。退室時間があったりしますが、僕は場所を変えるよりその方がより登場人物たちの閉塞感が見え隠れするのではと思いました。でも本当に佳作って罪だと僕も思います。

●『いきてるみ』

この作品もぜひ舞台を観たいと思いました。第一章は最初は小説みたいと思いましたが、これは演劇として成立していると確信しました。どれだけ言葉を尽くしても尽くし切れない、どれだけ形容しても言葉では足りない喪失感と絶望感がこの世界には存在していると思います。第三章は代替可能な人間達の様子が描かれていますが、何の作業をしているのかわからないところが素晴らしいです。第四章の成長する人間を演じ切る俳優の身体性を感じ取りたいと思いながら読みました。最後まで僕は大賞か佳作か悩みました。鈴木裕美選考委員のアニメーションにすると非常に面白いのではないかという意見にも賛同しました。

●『透明な羊』
　今回は天災によって何かしらの影響を受ける作品が多かったのですが、この作品もその一つ。亡くなった父親の姿がテープの音声によって浮かび上がるアイデアは上手いと思います。ただこのテープによって支配されるものは一体何なのでしょう。テープの内容が登場人物たちにどんな影響力があるのかが僕には感じ取れませんでした。全体的に雰囲気はわかるのですが、もう一つ先に行けるんじゃないかと思いました。登場人物の行動に理を感じてしまうのです。ハラハラの一歩手前、ドキドキの一歩手前で終わっている感じがして非常にもったいないと思いました。ラストシーンはいろんな解釈が可能なように描かれていて、舞台で観たらどんな印象になるのか非常に興味深く感じました。

●『その間にあるもの』
　この作品は読んでとても面白かったです。劇中劇で真相をつかみ取るという方法はよくあるのですが、この作品が成功しているのは役柄を代えて進行するところにあります。娘と母の葛藤シーンを実際の娘と父親が演じる場面は秀逸だと思いました。娘が初めて母親のことを「お母さん」と呼ぶまでに至る過程が丁寧に描かれています。それにしても「ポポポ」には驚きました。あの当時、朝から晩まで同じ CM が流れていて「ポポポーン」の CM も毎日うんざりするくらい目にしていたのに僕はスッカリ忘れていました。検索して思い出した瞬間にゾッとして僕も児玉さんみたいにアルミホイルを頭に巻かなきゃと焦りました。あそこで「ポポポーン」の唄を持って来るセンスに脱帽しました。

●『わたしのこえがきこえますか』
　年齢のせいなのか涙腺が弱くなってきているのは確かです。でも戯曲を読みながらここまで泣いたのは僕にとって、もしかしたら初めての経験かもしれません。耳の遠い老夫婦の設定を冒頭に持って来たのは上手いと思いました。さるぼぼを和美に見立てて進行するのも作品構成に見事にハマっています。隣の山田さんの人物像も良い感じの嫌らしさが出ていて面白いです。世間体を気にする父の姿からこの地域独特の地域性を感じますし、差別の呪縛を父がどう乗り越えるのかがポイントです。で、惜しいのはその乗り越え方です。父の変化が少々強引な感じがしてもったいないと思いました。でもそんな欠点を補って余りある作品で大賞に相応しいと思い、票を入れました。
　以上です。今回も指定された文字数を大幅に超えてしまいましてごめんなさい。
　次回はいよいよ三十回ですね。素晴らしい作品と出会えることを今から楽しみにしております。